

報道発表資料の配付日時 3月12日(火) 15時00分

発表項目 (行事名)	平成30年度第2回タンチョウ越冬分布調査の結果について		
記者レクチャー のお知らせ	(実施日時)	発表者	
		発表場所	
1 平成30年度第2回タンチョウ越冬分布調査を次のとおり実施しました。	区 分	平成30年度 第2回	平成29年度 第2回
	調査日時	1月25日(金) 14:45~15:15	1月25日(木) 14:45~15:15
	調査区域	7 振興局31市町村	6 振興局23市町村
	調査箇所	計239箇所	計206箇所
	調査協力者	関係市町村・給餌人等 計142人	関係市町村・給餌人等 計117人
	2 タンチョウ確認羽数	(単位:羽)	
	平成30年度 第2回	合計:1,031 (成鳥:856、幼鳥:124、不明:13、飼育個体:38) 野生個体:993 (釧路:888、十勝:91、根室:10、日高:3、空知:1)	
		【参考記録】 合計:1,397 (成鳥:1,224、幼鳥:135、不明:0、飼育個体:38) 野生個体:1,359 (釧路:1,254、十勝:91、根室:10、日高:3、空知:1)	
	平成29年度 第2回	合計:1,137 (成鳥:1,005、幼鳥:97、不明:0、飼育個体:35) 野生個体:1,102 (釧路:1,042、十勝:46、根室:9、日高:5)	
	※参考記録は、調査当日午前中に関係機関が実施したカウント調査等による確認羽数を元に飛来羽数を推計したものです。		
3 調査結果に対する有識者(正富 宏之 専修大学北海道短期大学名誉教授)のコメント			
	○ 調査時(15時時点)の記録数が少ないのは、三大給餌場の餌量削減によりツルの行動様式が変わり、給餌場への集まりが悪かったのが主な原因。 地元関係者による午前中の独自調査での確認羽数の加算による参考記録は1,359羽であり、これまでの最多記録。		
	○ 昨年は釧路、十勝、根室、日高の4管内で分布が見られたが、今年はこれに空知が加わり5管内に分布。1,900年以降で初めて道央圏の空知管内での越冬が確認された。		
	○ 堆肥や農家敷地内等で目撃されたツルの割合がこれまでより高くなり、人間活動領域への侵入、依存が増大している可能性が推測される。		
参 考	本事業は昨年度から北海道と包括連携協定を締結している日本航空株式会社(JAL)と協働で実施しています。		
報道(取材)に当たってのお願い			
他のクラブとの関係	同時配付	本庁及び下記の(総合)振興局で配付します。	
	同時レク		
担 当 (連絡先)	環境生活部環境局生物多様性保全課生物多様性戦略グループ 主幹 坂村 武 (直通011-204-5987 又は 代表011-231-4111) 日高振興局 環境生活課 課 長 田森 吉雄 (直通0146-22-9250) 自然環境係長 永井 秀和 (直通0146-22-9254)		
	※他管内の調査内容については、次の(総合)振興局までお問い合わせ願います。		
	区 分	電話番号	区 分
	空知総合振興局	0126-20-0043	十勝総合振興局
	胆振総合振興局	0143-24-9577	釧路総合振興局
	林-ツク総合振興局	0152-41-0630	根室振興局
			0155-26-9028
			0154-43-9154
			0153-23-6823

## 平成30年度第2回タンチョウ越冬分布調査の結果について

## 1 調査の趣旨

本調査は、絶滅危惧種のタンチョウの越冬分布、規模の把握等を目的に、給餌人の御協力のもと、環境省委嘱給餌場等の大規模給餌場を中心にタンチョウの飛来数、幼鳥の有無等を把握するとともに、関係機関等の御協力のもと、給餌場、自然採餌場や農家の存在等の分布要因に着目してタンチョウの所在位置情報について収集しました。

## 2 調査日時

平成31年1月25日(金) 午後2時45分～午後3時15分

## 3 調査区域及び調査箇所

- (1) 調査区域 7(総合)振興局、31市町村管内のタンチョウ生息地及び飛来地全域  
 (2) 調査箇所 合計239箇所

## ○調査地点所在市町村数の推移

(市町村)

振興局	平成30年度		平成29年度		平成28年度	
	第1回	第2回	第1回	第2回	第1回	第2回
釧路	8	8	8	8	8	8
十勝	11	11	10	7	8	7
根室	4	3	4	3	4	3
オホーツク	4	3	4	2	4	3
宗谷	2	-	2	-	3	-
日高	2	2	2	2	2	2
胆振	3	3	1	-	1	-
空知	3	1	1	1		
合計	37	31	32	23	30	23

## ○調査箇所数の推移

(箇所)

振興局	平成30年度		平成29年度		平成28年度	
	第1回	第2回	第1回	第2回	第1回	第2回
釧路	168	158	143	151	163	114
十勝	91	46	42	38	46	40
根室	22	7	21	6	17	7
オホーツク	13	5	13	2	10	6
宗谷	2	-	3	-	3	-
日高	6	7	6	7	6	7
胆振	11	14	5	-	2	-
空知	9	2	2	2	-	-
合計	322	239	235	206	247	174

## 4 調査主体及び調査協力機関等

## (1) 調査主体

北海道(環境省委託)

## (2) 調査協力機関等

市町村、市町村教育委員会、釧路市動物園、タンチョウ給餌人、日本航空株式会社、鳥獣保護管理員等

## ○調査協力者数

振興局	総計 (人数)	内 訳				
		関係市町村	関係市町村 教育委員会	タンチョウ 給餌人	鳥獣保護管理 員・自然保護監 視員・生物多様 性保護監視員	その他
釧路	104	22	12	15	8	47
十勝	23					23
根室	6	1		3	2	
オホーツク	0					
日高	3	1				2
胆振	5				1	4
空知	1	1				
合計	142	25	12	18	11	76

5 タンチョウ確認羽数（振興局別）

(羽)

振興局	平成30年度第1回				平成30年度第2回			
	成鳥	幼鳥	不明	計	成鳥	幼鳥	不明	計
釧路	669	81	6	756	761 (1,129)	114 (125)	13 (0)	888 (1,254)
十勝	171	25	0	196	84	7	0	91
根室	46	5	0	51	8	2	0	10
オホーツク	2	0	0	2	0	0	0	0
宗谷	4	1	0	5	-	-	-	0
日高	0	0	0	0	2	1	0	3
胆振	2	1	0	3	0	0	0	0
空知	3	0	0	3	1	0	0	1
小計	897	113	6	1,016	856 (1,224)	124 (135)	13 (0)	993 (1,359)
飼育個体	35	3	0	38	35	3	0	38
合計	932	116	6	1,054	891 (1,259)	127 (138)	13 (0)	1,031 (1,397)

※ 下段の括弧付き数字は、釧路市阿寒、鶴居村の羽数について、関係機関による午前9時の給餌場カウント調査等による確認羽数を元に当該地区の飛来羽数を推計した参考記録です。

<過去2カ年実績>

(羽)

振興局	平成29年度第1回				平成29年度第2回				平成28年度第1回				平成28年度第2回			
	成鳥	幼鳥	不明	計	成鳥	幼鳥	不明	計	成鳥	幼鳥	不明	計	成鳥	幼鳥	不明	計
釧路	457	53	28	538	949	93	0	1,042	630	48	3	681	969	105	39	1,113
十勝	59	8	0	67	44	2	0	46	141	26	0	167	67	5	0	72
根室	8	1	0	9	8	1	0	9	14	4	3	21	12	1	0	13
オホーツク	2	0	0	2	0	0	0	0	4	1	0	5	0	0	0	0
宗谷	0	0	0	0	-	-	-	-	0	0	0	0	-	-	-	-
日高	2	1	0	0	4	1	0	5	0	0	0	0	4	1	0	5
胆振	1	0	0	1	-	-	-	-	4	1	0	5	-	-	-	-
空知	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-
小計	529	63	28	620	1,005	97	0	1,102	793	80	6	879	1,052	112	39	1,203
飼育個体	32	1	0	33	33	2	0	35	28	1	0	29	31	2	0	33
合計	561	64	28	653	1,038	99	0	1,137	821	81	6	908	1,083	114	39	1,236

※「-」は調査を実施しなかったもの。「0」は調査を実施したが確認できなかったもの。  
※各年度の確認羽数の推移については別添グラフ参照。

6 調査当日の気象状況

○平成30年度第2回調査（平成31年1月25日 午後3時）

振興局	天候	気温	風向	風速	備考
釧路	晴	-0.3℃	北	8.5 m/s	釧路地方气象台
十勝	快晴	0.0℃	西北西	6.4 m/s	帯広測候所
根室	晴	-1.4℃	北西	8.0 m/s	釧路地方气象台
オホーツク	雪	-3.8℃	北北西	5.8 m/s	網走地方气象台
日高	晴	-1.1℃	北西	3.8 m/s	室蘭地方气象台
胆振	曇	-1.1℃	北北西	5.5 m/s	室蘭地方气象台
空知	曇	-2.9℃	北	2.7 m/s	札幌管区气象台

※<参考>平成29年度第2回調査（平成30年1月25日 午後3時）

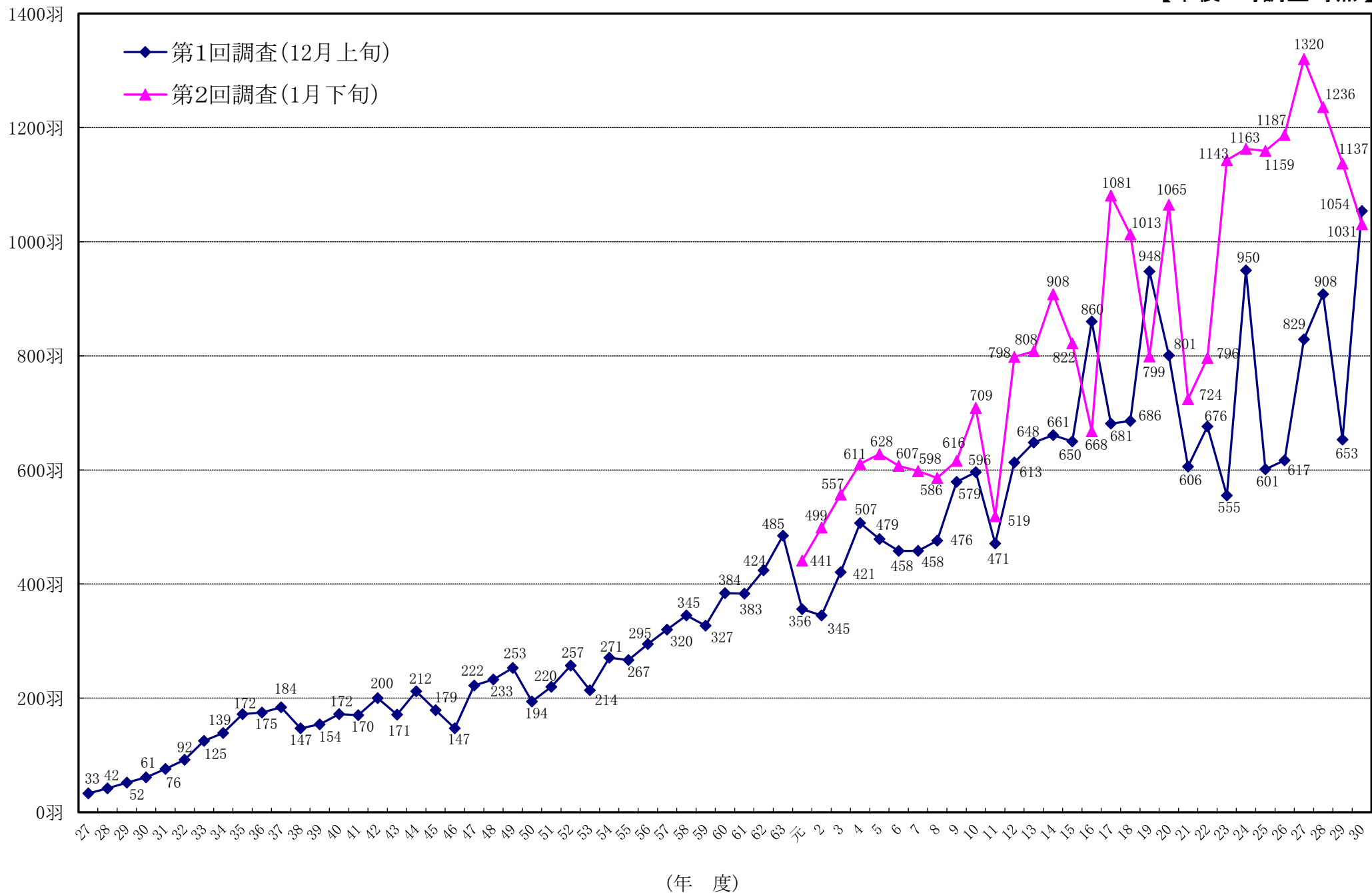
振興局	天候	気温	風向	風速	備考
釧路	曇	-2.8℃	北北西	2.9 m/s	釧路地方气象台
十勝	晴	-3.3℃	西	7.1 m/s	帯広測候所
根室	曇	-4.0℃	西	7.0 m/s	釧路地方气象台
オホーツク	曇	-4.9℃	北西	6.4 m/s	網走地方气象台
日高	晴	-4.6℃	北西	3.6 m/s	室蘭地方气象台
胆振	-	-	-	-	室蘭地方气象台
空知	雪	-5.8℃	西北西	5.2 m/s	札幌管区气象台

※<参考>平成28年度第2回調査（平成29年1月25日 午後3時）

振興局	天候	気温	風向	風速	備考
釧路	快晴	-4.0℃	南西	6.7 m/s	釧路地方气象台
十勝	快晴	-5.9℃	南南西	2.8 m/s	帯広測候所
根室	晴	-5.2℃	西	4.4 m/s	釧路地方气象台
オホーツク	晴	-5.7℃	西南西	1.2 m/s	網走地方气象台
日高	晴	-2.1℃	西北西	6.8 m/s	室蘭地方气象台
胆振	-	-	-	-	室蘭地方气象台
空知	-	-	-	-	札幌管区气象台

タンチョウ越冬分布調査（生息状況一斉調査）による各年度の確認羽数の推移（飼育個体含む。）

【午後3時調査時点】

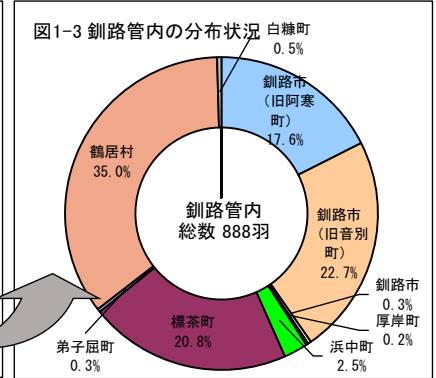
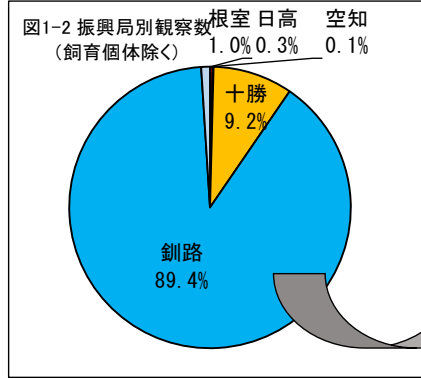
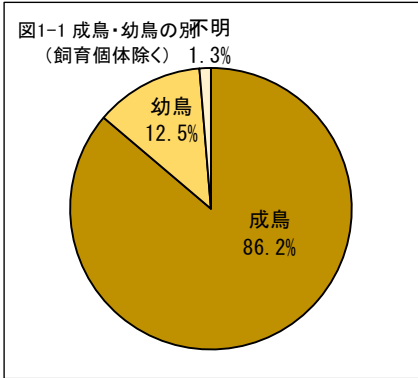


平成30年度第2回タンチョウ越冬分布調査結果(振興局別、観察場所別、給餌の有無等による分布状況)

1 振興局別分布(飼育個体を除く)

	成鳥	幼鳥	不明	合計
空知	1	0	0	1
日高	2	1	0	3
十勝	84	7	0	91
釧路	761	114	13	888
根室	8	2	0	10
合計	856	124	13	993

※飼育個体を除いた野生個体993羽について分析を行っています。【午後3時調査時点】

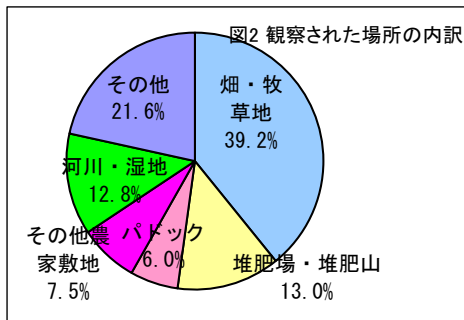


2 観察された場所の内訳

	①畑・牧草地	②堆肥場・堆肥山	③パドック	合計
空知	0	0	0	0
日高	0	0	0	0
十勝	40	32	0	72
釧路	349	87	60	496
根室	0	10	0	10
合計	389	129	60	578

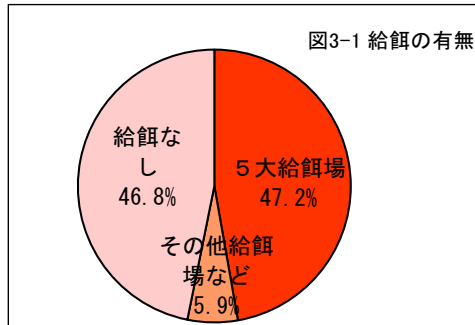
  

	④①-③以外農家敷地	⑤河川・湿地	⑥その他	合計
空知	0	1	0	1
日高	0	3	0	3
十勝	0	15	4	19
釧路	74	108	210	392
根室	0	0	0	0
合計	74	127	214	415



3-1 給餌の有無

	給餌あり(給餌場など)	(うち5大給餌場)	給餌なし	合計
空知	0	-	1	1
日高	0	-	3	3
十勝	4	-	87	91
釧路	524	(469)	364	888
根室	0	-	10	10
合計	528	(469)	465	993

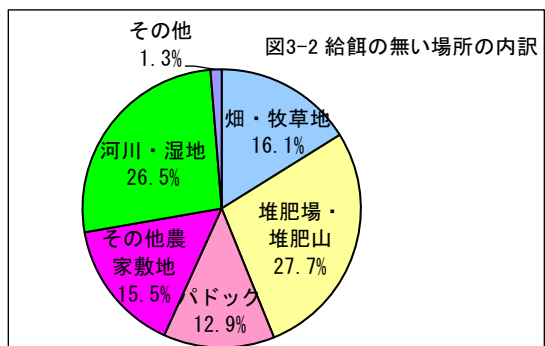


3-2 給餌のない場所の内訳

	①畑・牧草地	②堆肥場・堆肥山	③パドック	合計
空知	0	0	0	0
日高	0	0	0	0
十勝	40	32	0	72
釧路	35	87	60	182
根室	0	10	0	10
合計	75	129	60	264

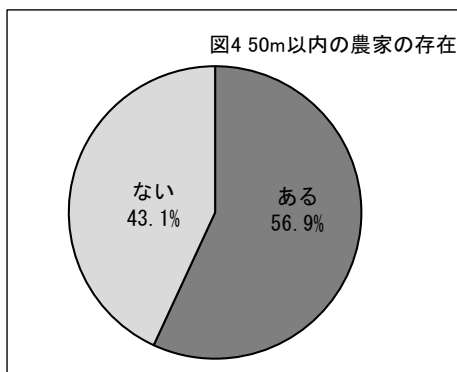
  

	④①-③以外農家敷地	⑤河川・湿地	⑥その他	合計
空知	0	1	0	1
日高	0	3	0	3
十勝	0	15	0	15
釧路	72	104	6	182
根室	0	0	0	0
合計	72	123	6	201



4 50m以内の農家の存在

	ある	ない	合計
空知	0	1	1
日高	3	0	3
十勝	8	83	91
釧路	544	344	888
根室	10	0	10
合計	565	428	993



2019年3月3日

## 2019年1月25日（平成30年度第2回）実施の タンチョウ越冬分布調査結果について

正富宏之

はじめに

今期の調査結果に関するコメントとして、最初に以下の点をご理解いただきたい。

環境省の委託により北海道が行うタンチョウ越冬分布調査は、12月の第1回と翌年1月の第2回とに分けられ、第2回はこれまで調査時刻を15時として行われてきた。しかし、2015年度から環境省が実施している三大給餌場（阿寒・下雪裡・中雪裡の給餌場）の給餌量削減の影響で、タンチョウ（以下ツルと表記）の行動パターンが従来と大きく変わり、15時の定時調査では特に羽数の把握が難しく、実情に合わない結果を生むこととなった。たまたま、今期は三大給餌場でツルが集合する午前中に独自にカウントが行われ、その数値を用いて作成されたのが参考資料である。

調査方法を事前に定め、地域全体で統一的行った調査の結果が公式の成果であり、今年もその点は変わらない。ただ、実態説明のコメントとしては、特に羽数にかかわる事項は参考資料を主として述べるが、基本は公式記録の補いであるため、参考記録を用いた場合は必ずその旨を記したことをご了解願いたい。

### 1. 記録羽数とその特徴

#### 1-1. 総羽数

記録総数（以下すべて野生個体のみ。成鳥と亜成鳥は区別せずに成鳥扱い）は993（うち成鳥856、幼鳥124、不明13）羽で、12月調査より23羽少ない。1月調査が12月調査より少なかったのは過去2回あるが、気候条件や調査直前の集団飛去などで、記録されない個体が生じたことによる。

しかし、今回記録数が少ないのは、三大給餌場の餌量削減によりツルの行動様式（日周期行動パターン）が変わり、調査時に給餌場への集まりが悪かったのが主な原因である。幸い、当日午前9時に三大給餌場等で地元関係者のご努力により独自に調査が行われ、地域の状況も踏まえて366羽の加算が可能とみなされ、参考記録として総数は1,359（成鳥1,224、幼鳥135）羽とされた。これは従来最多の平成28年1月（平成27年度第2回調査）の1,285（成鳥1,152、幼鳥123）羽より74羽多く、これまでの最多記録である。従って、参考記録を用いれば30年度は12月・1月調査とも従来記録を超えたことになり、こうした事例は過去30年間で7例目

となる。

#### 1-2. 増減状況

1月調査の参考記録を12月調査結果と比べると、総数で343羽多く、増加割合は1.3倍となる。このうち成鳥は1.4倍、幼鳥は1.2倍で、他の年と比べても通常の範囲内にあると言える。

参考記録をもとに前年と比較すると、総数で257（成鳥219、幼鳥38）羽の増加で、伸び率は23.3%と高い値を示した。しかし、前年がかなり少ない記録数のため、これまで最多を示した平成28年1月の羽数と比べると5.8%の伸びにとどまる。それでも、公表された羽数の経年変化（折れ線グラフ）を見ると、全体的に増加傾向が認められる。

#### 1-3. 実態との差

公式調査では、午前中に三大給餌場を利用しながら、午後の調査時刻に人目に付きにくい周辺へ散らばり、記録から抜け落ちた個体が多いと思われる。また、参考記録にしても、二重カウントを避ける操作により、本来加えるべき羽数を除外するという不都合は残る。さらに、十勝・釧路・根室各振興局（以下振興局を省略）管内に広く分散した個体の確認は、調査方法上の制約で現状ではかなり困難である。恐らくその数は、参考資料の数値を基準にしても300-400羽ほどと推測され、これをどのように埋めていくかについては、最後の項で短く触れる。

#### 1-4. 各給餌場の飛来数

いわゆる五大給餌場（各々に冬は通常100羽以上集まる）のなかで、最も羽数が多かったのは音別の154羽、次いで中茶安別の106羽で、この2か所のみ100羽を超えた。他方、残りの三大給餌場の阿寒95羽、中雪裡97羽、下雪裡はわずか17羽で、2017年1月にそれぞれ166羽、143羽、148羽であったから、給餌量削減の影響が顕著に現れたことになる。ただし、参考資料によれば、調査当日午前9時の時点で阿寒156羽、中雪裡289羽、下雪裡232羽が数えられ、給餌場利用個体数そのものが100羽以下だったのではない。

五大給餌場とそれ以外の場所での目撃数を比べると（添付資料図3-1参照）、2019-2018年は前者が全体の5割弱で最も割合が低く、2017-2016年は5割強、2015年は6割、2014年は7割、2013年には8割と高い割合の羽数を示す。つまり、今年まで順次五大給餌場での記録羽数割合は低下を示し、給餌量削減が関与している可能性もあるが、給餌場への集合状況は他の要因によっても変わるため、今のところ確かなことは言えない。なお、給餌量削減と、個体数を含めた分布との関連は後にも短く触れる。

#### 1-5. 今年の特徴と理由

「羽数記録が低い値しか得られなかったのは残念である」と、昨年コメントと同じ文言で

今年の羽数結果を総括するのは気が重い。しかも、給餌量削減によるツルの日周行動パターン変化に対する調査実施時刻の不適合が、過少結果を招いた最大原因で、すでに前回もその指摘と改善策を求めている。ただ、今年は統一調査時刻とは別に独自のカウントが3大給餌場で行われていて、それを参考記録として考慮することにより、過去最多の羽数を記録できたのは、幸いである。

## 2. 分布状況

2-1. 分布管内数：昨年は釧路、十勝、根室、日高の4管内で分布が見られたが、今年はこれに空知が加わり、5管内での記録となった。しかも、従来は前4者にオホーツクでの散発的記録があったものの、分布域は道東が主で、これに日高が加わった範囲にとどまっていた。しかし、今年は、恐らく1900年以降で初めて、道央圏の空知管内でも越冬が確認されたのが特色である。

2-2. 各管内への集中度：参考資料に基づくと、釧路管内への集中度92.3%（前年比-2.3ポイント）が突出して高く、次いで十勝管内6.7%（+2.5ポイント）、根室管内0.7%（-0.1ポイント）、日高管内0.2%（-0.3ポイント）、空知管内0.1%となる。直近5年間の平均集中度と比べると、釧路は3.3ポイント低く、その分十勝が高く、近年における釧路管内への集中度低下傾向の一端がうかがえる。ただ、十勝・根室両管内における目撃例が今回も現実よりかなり少な目と思われるので、実際の集中度は釧路がより低く、十勝と根室がより高いと予想される。

2-3. 市町村別の羽数と分布：ツルが目撃されたのは、1市、12町、1村の計14市町村で、前年より1市（根室市）少なく、3町（音更町、白糠町、長沼町）多い。参考資料を基にすると、最も羽数の多かったのは鶴居村の660羽、次いで釧路市の378羽、標茶町の185羽で、この3市町村で全体の90%（前年は93.7%）を占める。これらの市町村で羽数が多いのは五大給餌場が含まれるため、順位も前年と変わらない。さらには大樹町66羽、浜中町22羽、幕別町15羽などが続き、これら3町を前者と合わせると羽数は全体の97.6%に達する。

ただ、分散しているツルを十分捉えられていない自治体も、特に十勝や根室管内に多いと想定されるので、ツルが越冬しているとされる上記の市町村数や羽数は、今のところ確実な数とは言えない。また、調査方法上の制約で、大給餌場でのカウント数が年により変動するため、市町村におけるツルの分布割合にもかなり年変化が生じてしまう。

2-4. 利用環境：添付資料の図2は、調査時点にツルがいた環境を示しており、畑や牧草地（雪上）にいる場合が最も多くて約4割（39.2%）を占める。さらに、農家敷地内と言えるパドックや家屋付近、さらに堆肥も畜舎近くにあることが多いから、この三者が全体の約1/4を



占め、ヒトの日常活動・生活圏内又は近傍にツルが存在していることになる。これに対し、側溝等の農業用人工物も一部含まれるであろうが、河川・湿地といった自然環境下での記録は12.8%にとどまり、ツルが冬期はいかに人工的環境に依存して暮らしているかを示唆する資料と言えるであろう。

さらに、2014-2018年の5年間の調査結果と比べると、堆肥での目撃が今年は13.0（括弧内は5年間の平均3.6）%、パドックが6.0（2.2）%、農家敷地内が7.5（2.8）%、河川・湿地が12.8（6.9）%といずれも今年の高い割合を示し、反対に、畑・牧草地が39.2（81.0）%と半分以下であった。つまり、今回の調査結果から推測する限り、自然環境下での餌探しも増えているが、堆肥での大幅な目撃増加のように農業関連環境・施設への索餌依存度が高まり、より深く農家の活動領域への侵入傾向が強められており、その背景に三大給餌場の餌削減に関わる可能性が高いとする解釈も否定できない。ただし、冬期利用環境の状態は天候その他の条件で年により変わるし、かつ調査が1日の短時間観察によるため、環境とツルの利用との関連性を確実に提示するには、より計画性を備えた長期的なモニタリング調査が必要になろう。

### 3. 繁殖状況

幼鳥は124羽で前年より27羽、最近5（2014-2018）年間の平均幼鳥数111羽より13羽といずれも多く、2012年と2015年に次ぐ過去3番目の羽数である。また、全体での幼鳥割合は12.7%で、最近10（2009-2018）年間の平均値を2.8ポイントも上回る。しかし、幼鳥の割合が少ない大給餌場の羽数が十分把握できていないため、参考資料でそれを補うと、幼鳥割合は9.9%で、10年間の平均9.9%に等しい。大給餌場へ依存せずに冬を越すツルでは幼鳥割合が高い傾向があるため、十勝や根室管内等で調査精度が上がれば、実際の幼鳥割合は高くなると予想される。従って、今年度の繁殖状況は今のところ普通とみなして良いであろう。

### 4. 評価と課題・提言

今回の調査で注目すべき点が三つある。ひとつは、参考記録を基にすると1952年の調査開始以来最多個体数を記録した点である。二つ目は、20世紀初頭の道央でのタンチョウ消滅後、日高管内に続き、道央中心域の空知管内において初の越冬が確認され、冬期分布の道央圏への拡大傾向が明確にされた点である。三つ目は、堆肥や農家敷地内施設で目撃されたツルの割合がこれまでより高くなり、大給餌場における餌削減による日周活動のパターンの変化とともに、人間活動領域への侵入・依存が増大している可能性を推測させる点である。

ただし、一つ目は、調査時間を臨時に設定して、実態に沿うような調査を行った操作抜きで

は語れない。また、二つ目は、調査時に確認されなかったものの、道央圏での越冬羽数が今冬すでに二桁に達しているとの情報もあり、実態の把握にはより多くの確実な目撃情報が求められる。さらに、三つ目は、ごく短時間の調査による目撃情報の集積を基にしており、人間活動領域への依存増大を認定するには、より期間が長く精度の高いモニタリングが必要である。

いずれにしても、タンチョウは近年分散して分布域を広げているため、少人数で確実にその場所を短時間で抑えることが難しい。しかも、調査の表題が分布調査となっているものの、所在場所と同時にツルの数や年齢構成等を正確に捉えなければ、分布状況の十分な理解はできない。これまで繰り返し指摘しているように、そのための調査方法の改善が不可欠であり、今回の結果のように、従来方法による場合と参考資料を用いた場合とでは大きな違いが生じるため、それを基にした判断や施策に不都合を生じる恐れがある。

現在、タンチョウを分散させる事業として給餌量削減が進行中であるが、それがタンチョウの群れにどのような影響を与えるかを検証する作業として、毎年1月の調査は重要な位置を占める。従って、これまでの提言をあえて繰り返すが、ボランティア調査員として広く地域住民参加を呼び掛けるとか、他の機関や団体を通じての組織的情報収集など、多様な方法を用いて、より精度の高い調査を次年度から行なうことが強く望まれる。